降臨節前主日（11月20日の聖書箇所）

Ⅰ第一朗読（エレミヤ23章1―6節）

1「災いだ、わたしの牧場の羊の群れを滅ぼし散らす牧者たちは」と主は言われる。2 それゆえ、
イスラエルの神、主はわたしの民を牧する牧者たちについて、こう言われる。
「あなたたちは、わたしの羊の群れを散らし、追い払うばかりで、顧みることをしなかった。わ
たしはあなたたちの悪い行いを罰する」と主は言われる。
3「このわたしが、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国々から集め、もとの牧場に帰らせ
る。群れは子を産み、数を増やす。4 彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れるこ
とも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」と主は言われる。
5 見よ、このような日が来る、と主は言われる。
わたしはダビデのために正しい若枝を起こす。
王は治め、栄え
この国に正義と恵みの業を行う。
6 彼の代にユダは救われ
イスラエルは安らかに住む。
彼の名は、「主は我らの救い」と呼ばれる。

言葉の解説

■捕囚の時代（前六世紀）の預言者エレミヤが理想の王（メシア王）の到来を預言する。

1節■「災いだ」。この語（ホーイ）は不満や苦痛を表す間投詞で、挽歌の起句として使われた。■「牧者」。古代中東世界では王のこと。王は神から民を預かった「牧者」。民を滅ぼし散らすなら、救いに縁のない死者として「災いだ」と言われてしまう。

2節■「わたしの民」。エレミヤにとってイスラエルは「わたしの民」。それほどに気がかりな存在。■「顧みる…罰する」。どちらも動詞パーカド。②の「言葉の広がり」を見よ。

3節■「このわたしが」。一人称単数の動詞形「集める」の前に、一人称単数の人称代名詞がおかれ、強調されている。■「追いやった」。この動詞は一人称単数形だから、神が主語。捕囚はイスラエルの神がバビロニアの神々に力負けした結果ではない。捕囚を黙認したのは、いっそう大きな恵みを与えるため。

4節■「迷い出る」。これも動詞パーカド。7頁「言葉の広がり」を見よ。

5節■「若枝」。この語は動詞ツァーマハ（芽生える）から派生した名詞ツェマハであり、比喩的に使われると、「ダビデの子孫から出現する（メシア）王」を指す（エレ三三15、ザカ三8、六12）。このイメージの出発点は、ダビデの最後の言葉とされる「わたしの救い、わたしの喜びをすべて神は芽生えさせてくださる（ツァーマハ）」（サム下二三5）であろう。■「王は治め」。「彼は王として治め」と訳すべきだろう。■「この国に」。直訳「この地に」。

6節■「彼の名は、『主は我らの救い』と呼ばれる」。名はその担い手の何らかの本質を表す。この王を通して、神の本質が告げられる。彼は神と密接な関わりをもつ人物。ソドムの支配者らよ、主の言葉を聞け。

①イスラエルが王制を取ることになるのは、周辺諸国よりもはるかに遅れ、前11世紀末のことである。神が真の王だと考えるイスラエルには、人間の王は不必要だと思われていたからである。しかし、当時、ペリシテがパレスチナの覇権を求め始めたことが、このような伝統的な価値観を放棄させることになりった。というのは、ペリシテは鉄の文明を独占する強国で、常備軍を備えていたから、彼らに対抗する唯一の道は「王が裁きを行い、王が陣頭に立って進み、我々の戦いをたたかう」（サム上八20）王制にあると考える人が多くなったからだ。

現実への対処から王制導入を余儀なくされたが、王を持つことの危険性を忘れたわけではな

い。周辺諸国の王とは違って、さまざまな制約が加えられることになった。古代中東世界における王は、神々の奴隷として造られた庶民とは違って、神の似姿、神の子とされた（神王イデオロギー）。しかし、イスラエルの王は、「…神なる主を畏れることを学び、この律法のすべての言葉とこれらの掟を忠実に守らねばならない。そうすれば王は同胞を見下して高ぶることなく…」と述べる申一七14以下が示すように、絶対王政に陥ることへの警戒心が消滅したのではない。そこで、今日の朗読にも見られるように、王は常に預言者の厳しい批判にさらされていた。

だから、エレミヤも22章で、彼の時代の王ヨヤキムを「災いだ、恵みの業を行わず自分の宮殿を、正義を行わずに高殿を建て、同胞をただで働かせ、賃金を払わない者は。…あなたは、レバノン杉を多く得れば、立派な王だと思うのか」と批判している。

古代中東世界にならい、イスラエルでも王が「牧者」と呼ばれるので、今日の朗読で「災いだ」と断罪されているのは、22章で厳しく批判されたヨヤキム王をはじめとする当時の指導者階級である。彼らの罪は「羊の群れを散らし。追い払うばかりで、顧みることをしなかった」ことにある。そこで、神が彼らを「罰する」ことになるが、傍線をつけた「顧みる」と「罰する」は②の「言葉の広がり」に書いたように、同じ言葉である。牧者の使命は群れを「顧みる（パーカド）」ことにあるが、それを怠れば、彼にご自分の群れを託した神が「罰する（パーカド）」ことになる。

このように、イスラエルの歴史においては、王に対する警戒心が常に維持されているが、もう一方で、ダビデへの約束も忘れ去られはしなかった。神殿を建立しようとしたダビデに対して、神は彼による建設を拒絶したあとで、ダビデの王朝の永遠性を約束し、「…あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者がわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえに堅く据える」（サム下七12以下）と述べている（この神の約束が「ダビデ契約」と呼ばれる）。

神は群れを「顧みることをしなかった」現実の王を罰するが、追いやられていた群れを「もとの牧場に帰らせ」、新たな牧者を「ダビデのために」立てる。「ダビデのために」と言われているのは、この「ダビデ契約」があるからだ。しかし、この王は、「見よ、このような日が来る」という荘厳な言い回しからも分かるように、これまでの王とはまったく異なる王である。彼の名は「主は我らの救い」と呼ばれ、神の救いの意志を余すところなく現す特別な王なのである。

確かに苦しむとは述べられていないが、彼の行う「正義と恵みの業」によって、人々が「救われ…安らかに住む」ことになる。人間の王に失望した神だが、ダビデへの約束を忘れずに、救いを成就させる。

②言葉の広がり（顧みる・罰する・迷い出る――動詞パーカドの意味――）

動詞パーカドは今日の朗読では三度使われている。訳語から見ると、とても同じ動詞とは思えないが、2節の「顧みる」と「罰する」、さらに4節の「迷い出る」がこの語である。この語は基本的には「上位者が下の者に特別の注意を払い、下の者の状況を変えるような形でかかわる」の意味である。

一般的にいって、上位者に期待されるのは、下の者への正義にかなった態度や行動である。だから、まずは「顧みる」（出三16、詩八5）、「面倒を見る」（王下九34）、「恵みをもって訪れる」（創二一1）の意味になる。

しかし、下の者が罪の状態にあれば、その関わりは「罰する」という形にならざるをえない。羊の群れを「顧みる」ことをしなかった牧者に対して、神は「罰する」という仕方で関わりを持つことになる。

他者への関心は「捜し求める」（イザ二六16）ということにつながるが、それがむなしい結果に終わり、「不在に気づく」（サム上二〇6）こともある。6節はパーカドの受動形であり、「迷い出る」と訳されている。

Ⅱ第二朗読（コロサイの信徒への手紙1章11―20節）

11そして、神の栄光の力に従い、あらゆる力によって強められ、どんなことも根気強く耐え忍ぶように。喜びをもって、12光の中にある聖なる者たちの相続分に、あなたがたがあずかれるようにしてくださった御父に感謝するように。13御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。14わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。15御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。16天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。17御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。18また、御子はその体である教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。19神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、20その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。

言葉の解説

12節■「光」。ここでは、罪や不従順と対比される「善い行いへと導く真理」、あるいは、死と対比される「いのち」のいずれかを指すだろう。■「相続分」。直訳は「くじの分け前」。「くじ」と訳される語クレーロスは元来、人間の意志とは無関係に下される神的決定を意味する。この語は神からイスラエルに与えられた「所有地・相続財産」を表し、さらに、終末に与えられる神の祝福としての「永遠の相続」を意味する。そこから、永遠の命や神の国を受け継ぐことを表すようになった。

13節■「闇」。人格化して「悪魔」の意味に取るよりも、キリストへと回心する前に私たちが属していた領域で支配的な行動原理を指すと見るのがよいだろう。闇が私たちに対して自由に行動し、支配していたが、神はそこから私たちを救い出した。

14節■「贖い（アポリュトローシス）」。この語はもともと奴隷や捕虜を「金を払って買い戻すこと」を意味するが、ここでは金の支払いよりも、解放された状態を表そうとしている。■「赦し（アフェシス）」。動詞アフィーエーミ〈放っておく〉からの派生語。この語にも「解放」の意味がある。

15節■「見えない神の姿」。御子において、見えない神が見えるものとなったという事実を表す。

16節■「万物は御子によって、御子のために」。御子は万物創造の要因であり、目標である。このような理解は黙二二13では「初めであり、終わりである」と表されている。

20節■「その十字架の血によって」。平和をもたらしたのはイエスの死という出来事であることを強調している。

①今日の朗読の前半（11―14節）では、神が「あなたがた」と「わたしたち」に何を行ってくれたかを述べている。「あなたがた」とはこの手紙の受取人であるコロサイ教会の人々であり、「わたしたち」とはこの手紙の筆者と受取人にとどまらず、神によって自由にされたすべての信徒を指している。

「あなたがた」は神によって「聖なる者たちの相続分にあずかれるように」してもらっている。「聖なる」という語は元来、祭儀のために「取り分けられた」を意味し、そこから「神にささげられた、聖なる」という意味になってゆくから、「聖なる者」とは、神にささげられることによってその聖性に入れられた者のことであって、「聖くされた者」のことである。かつては「神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していた」コロサイの人々も（一21）、今は「聖なる者」とされている。彼らは永遠の命にあずかることができるが、そのようにと行動を起こしたのは父なる神である。

コロサイの人々に働きかけた神はまた、「わたしたち」を闇の力から救い出して、御子の支配下に移してくれている。「力（エクスーシアー）」は元来「行動の自由」を表し、そこから他に対して

自由に行動できる「権力、権威」を意味するようになた。かつて私たちが属していた領域では「闇」が私たちに対して行動の自由を持ち、支配していたが、神はそこから私たちを救い出した。

神は「あなたがた」を聖なる者として永遠の命にふさわしい者とし、「わたしたち」を闇の支配から救い出したが、それは「御子」を通して行われたということが強調されている。御子によって人間に与えられる救いは「贖い」であり、「罪の赦し」である。その救いの意義を明らかにするために、朗読の後半では初代教会で歌われていたと思われるキリスト賛歌を引用している（15―20節）。

この賛歌は、「御子は見えない神の姿である」と歌う（15節）。人間には見ることのできない神がどのような存在であるかを見せてくれたのは御子イエスである。御子は万物の創造の前から存在し、その創造の要因であり、目標である（16節）。万物は「御子によって（において）」まとめ上げられ、支えられている（17節）。このように御子は「初めの者」だが、「死者の中から最初に生まれた方」となることによって、「すべてのことにおいて第一の者」となった。従って、すべてのものが「御子によって」支えられているということが現実になったのは、イエスが「死者の中からの復活」したということによってである。その御子が「頭」となる教会は、死者の中からの復活という希望に生きる者の集まりである。この希望から人々が離れることがないようにと、彼らの目をイエスの十字架へと向けさせる。

神の思いで満ちている御子は、十字架の上で血を流すことによって、闇に支配されている人間を買い戻した。御子の死を通して、闇の奴隷となった人間を買い戻すこと、それが神のもたらした「贖い（解放）」である。それは「罪の赦し」ともなる。「罪」とはこの文脈では、「神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対している」ことである。背を向けているすべての者を御自分のもとへと立ち帰らせ、万物創造の秩序を回復させようとした神は、人が犯した罪の責任を問おうとはしなかった。神が罪を咎めようとしなかったのは、すべてを御子の十字架の血によって御自分と和解させるためである。こうして私たちに「罪の赦し」が与えられた。

だから、「あなたがた」の救いも、「わたしたち」の解放も、万物にもたらされる平和も、すべて御子イエスの死によって与えられたのである。まさに神が私たちと和解しようとしたのだ。

②言葉の広がり（闇・スコトス）

この語は、まず文字どおりに「闇、暗闇」を意味する。礼服を着けていない婚宴の客は外の「暗闇」にほうり出され（マタ二二13）、イエスが十字架にかけられた時、全地は「暗く」なった（マタ二七45並行）。

次に、転義して、誰にも知られていない状態を表す。主は「闇」の中に隠されている秘密を明るみに出して裁く（1コリ四5）。

さらに「光」と対比され、宗教的、道徳的な闇、罪によって引き起こされている暗さ、不信仰な者や神なき者の状態を表す。「暗闇」に住む民が大きな光を見たのに（マタ四16）、悪を行う者はその行いが明るみに出されるのを恐れて、光よりも「闇」の方を好んだ（ヨハ三19）。しかし、キリスト者は光の子であり、「暗闇」には属していないから、主の日が突然襲うことはない（1テサ五4―5）。

今日の朗読でも光の領域と闇の領域が対比され、神は私たちを「闇」の力から救い出し、その愛する御子の支配下に移したと述べている。神の愛が現された御子の十字架に光を見た者は、二度と闇の支配に下ることはない。

Ⅲ福音（ルカ23章35―43節）

35 民衆は立って見つめていた。
議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、
自分を救うがよい。」36 兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、37
言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」38 イエスの頭の上には、「これはユダヤ
人の王」と書いた札も掲げてあった。39 十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののし
った。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」40 すると、もう一人の方がたし
なめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。41 我々は、自分のやったこと
の報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」42 そして、
「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。43
するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

言葉の解説

35節■「民衆」。マタ二七39とマコ一五29では通行人がイエスを罵るが、ルカでは民衆が立って見つめている。また、イエスが息を引き取った後、群衆が「胸を打ちながら帰って行った」と述べるのもルカだけである（ルカ二三48）。「胸を打つ」のは、神の憐れみを願って遠くに立ちつくす徴税人の姿を描写するときにも用いられていた（ルカ一八13）。■「選ばれた者」。マタイとマルコには見られない語。イザヤに登場する「苦難の僕」は「わたしが選び、喜び迎える者」と呼ばれる（イザ四二1）。イエスがエルサレムで遂げようとしている「最期（エクソドス）」についてモーセとエリヤが話し合う変容の場面で、イエスは「わたしの子、選ばれた者」と呼ばれている（九31・35）。■「自分を救うがよい」。直訳では「彼は彼自身を救え」。議員たちは三人称で語ることによってイエスを突き放す。ちなみに37節の兵士はイエスを二人称で表し、「あなたはあなた自身を救え」と語りかけている。

36節■「酸いぶどう酒」。兵士や一般の民衆が飲んだ強い味のぶどう酒。兵士がこれをイエスに差し出した意図は様々に解釈されている。詩六九22と関連づけるなら、これは悪意や敵意の行為となる。あるいは、安物のぶどう酒を「王様」に献上して、からかっているとも考えられる。

39節■「ののしった」。未完了過去形。動作の継続・反復を示す形。

43節■「楽園」。七十人訳では、創二8の「（エデンの）園」がこの語で表されている。元来は空間的概念の強い語であるが、後に神の民が将来享受する幸福を示すようになった（イザ五一3）。

①今日の福音は、「民衆は立って見つめていた」という言葉で始まっている。ここには民の指導者、兵士、十字架にかけられた犯罪人が次々に登場して、イエスを罵倒する。マルコの並行箇所（一五30）に登場する群衆は「自分を救ってみろ」とからかい、イエスをののしるが、ルカの民衆は目の前で起こっている一部始終を静かに見つめる人たちである。ルカはその視線の先にイエスの十字架を置いて、読者も一緒に十字架を見つめるようにと招いている。

しかし、議員たち、兵士たち、イエスと一緒に十字架につけられた犯罪人の一人は、十字架にかけられたイエスを、「あざ笑い、侮辱し、ののしる」人たちである。彼らはいずれも、「もしメシアであるなら自分自身を救え」とイエスに挑発の言葉を投げかけている。

最初に、議員たちがイエスをあざ笑う。「あざ笑う」という動詞は名詞「鼻」から派生し、鼻でせせら笑う様子を表す。彼らの言葉を直訳すると「もし彼がメシアなら、彼は彼自身を救え」となる。目の前のイエスを三人称で「彼」と呼んでいるところに彼らの心情が表れている。十字架につけられたイエスは直接語りかける相手ではないとみている。

次に兵士たちが登場してイエスを侮辱する。「侮辱する」という動詞は、「遊ぶ」に由来する語である。彼らは、当時一般民衆の飲み物であった「酸いぶどう酒」をイエスに差し出しながら、「王であるなら、自分を救え」とからかう。安物の酒を「ユダヤ人の王」に差し出すことに

よってイエスを侮辱しているのであろう（詩六九22参照）。

続いて、十字架につけられた犯罪人の一人がイエスをののしる。「ののしる」という動詞は動作の反復を表す未完了形だから、彼は繰り返しイエスをののしったことになる。

おそらくイエスから一番離れた所に立つ「議員たち」も、侮辱するためには近寄らねばならなかった「兵士たち」も、イエスのすぐ隣で十字架にかけられた「犯罪人の一人」も、イエスがメシアであれば、十字架から降りて自分を救うことができるはずなのに、十字架にかかったままであるから、イエスはメシアではない、と考える点では一致している。彼らから見れば、イエスの十字架は彼が「選ばれた者」、すなわちメシア（＝キリスト）ではないことの何よりの証拠なのである。

ところが、イエスを挟んで反対側にいたもう一人の犯罪人は、仲間をたしなめて、「お前は神をも恐れないのか」と諭す。犯罪を犯した報いとして十字架にかけられた自分たちと、悪いことは何もしていないのに一緒に同じ刑を受け、ともに死を担おうとしているイエスとの違いにこの人は気づいている。無実な正しい人が死を甘受するという事実に、神のメッセージが込められているのだと彼は説く。さらに彼は「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と願う（詩一〇六4参照）。彼が見た十字架のイエスは、罪人とともに生きるメシアである。イエスは十字架から降りられないのではなく、むしろ、降りないことによってメシアなのだ。

イエスを挟んで二つの十字架観が対置されています。一方には十字架から降りることのできないイエスはメシアではなく、十字架は彼がメシアではないことの証拠だと見なす人がいる。反対側にはイエスは十字架から降りないからメシアなのであり、十字架こそ彼がメシアであるしるしなのだと考える人がいる。

この出来事を「立って見つめる」民衆は我々読者の姿でもある。二つの十字架観のどちらを選ぶのか、その選択が我々に迫られている。

②言葉の広がり（刑罰・クリマ）

この語は動詞クリーノー〈分ける・裁く〉から派生した名詞である。①「（裁判を必要とする）争い・訴訟」を表す。教会員の間に「裁判ざた」があること自体が敗北である（1コリ六7）。

次に②「決定・判定」の意味でも使う。神の「定め」は計り知れない（ロマ一一33）。

次に③「（神が行う）裁き・審判」を指す。来るべき「裁き」があり（使二四25）、永遠の「審判」がある（ヘブ六2）。

次に④「裁判による判定・判決」を表し、だいたいは「有罪判決・刑罰」の意味になる。律法学者は人一倍厳しい「裁き」を受け（マタ二三14）、神の決定に背く者は自分の身に「裁き」を受ける（ロマ一三2）。他に、兄弟への配慮を欠く者（1コリ一一29）、信徒を惑わす者（ガラ五10）、高慢になった者（1テモ三6）、偽教師たち（2ペト二3）、不信心な者（ユダ4）が「裁き」を受ける。今日の福音でも「（有罪判決にもとづく）刑罰」の意味で使われている。